

悩める教員のためのオンライン授業（講義科目）の期末評価 Vol.1

1 この資料の対象者・趣旨・ねらい

今学期、わずかな例外科目以外は学期末までオンライン授業となり、通常の定期試験も行われなくなりました。本資料は、当初は期末試験を実施する予定だった講義科目をご担当で、「その期末評価をどうする？」と思っている教員の方々に向けて作成されています。

試験を期末レポートに切り替えるくらいしか方法はないのか？

オンラインでも安全かつ公平に試験をおこなう方法はあるのか？

期末レポート、オンライン方式の試験以外に方法はあるのか？

・・・などなど、少し考えあぐねておられる先生方に役立てて頂けたら幸いです。

2 通常の講義科目の評価手法

通常の講義科目の期末評価は、多くの場合、以下のような方法で行われていると思います。

A 定期試験 B 期末レポート

C AあるいはBと、小レポート・中間試験等との併用

D A、BあるいはCと、平常点の併用

このうち、

(1) 「期末レポート」あるいは「小レポート」方式で採点予定だった場合

当初、教室で提出・受領の予定だった場合には、提出先・提出方法が変更になりますが、それ以外に、オンライン授業になったことで生じる実施方法上の大きな変更はないと考えられます。この場合、「学習支援システム」（あるいはGoogle Classroom）の「課題」機能を用いて課題を出し、提出を求める方法で、実施されることと思います。

「学習支援システム」の「課題」機能の使い方については、以下ページの「レポートの提出（内容の指示、公開期間や提出期日の設定可）」を参照下さい。

<https://hosei-kyoiku.jp/firstguide/>

多少の留意点としては、以下は「オンライン授業ニュース Vol.16」の再掲ですが、学生は自分のレポートが無事に届いているのか、不安に思っている場合もあるようですので、あらかじめ、学習支援システム上の「課題」からレポートを提出した場合に、提出確認のメールが学生の大学メールアドレス宛に届く仕組みについて、学生に教示いただくと良いと思います。以下が学生版「学習支援システム」マニュアルの該当ページです。

[https://hosei-kyoiku.jp/wp-](https://hosei-kyoiku.jp/wp-content/uploads/2020/05/%E2%91%AC%E3%80%90%E6%8E%88%E6%A5%AD%E7%94%BB%E9%9D%A2%E3%80%91%E8%AA%B2%E9%A1%8C.pdf)

[content/uploads/2020/05/%E2%91%AC%E3%80%90%E6%8E%88%E6%A5%AD%E7%94%BB%E9%9D%A2%E3%80%91%E8%AA%B2%E9%A1%8C.pdf](https://hosei-kyoiku.jp/wp-content/uploads/2020/05/%E2%91%AC%E3%80%90%E6%8E%88%E6%A5%AD%E7%94%BB%E9%9D%A2%E3%80%91%E8%AA%B2%E9%A1%8C.pdf)

(2) 平常点（あるいは出席点）の併用を予定されていた場合

すでに学期も半ば過ぎの時期ですので、毎回の授業で受講生から何らかりアクションの提出を求めるなど方法で、平常点の採点方法を取られていることと思います。

・・・では、「試験」を予定していた場合、どうすれば良いのだろうか？

3 オンライン授業における「試験」による評価手法

A 「教室での定期試験にできるだけ近づけたい」のであれば・・・

- (1) 期末評価のために、オンラインで学生に「試験（課題）」を課す場合でも、できるだけ教室での定期試験に近い形で実施することは、まったく不可能なわけではありません。
- (2) 学習支援システムの「テスト／アンケート」機能、または「課題」機能を、Google Classroom 場合には、「テスト付きの課題」機能、または「課題」機能を使うことになると思いますが、要は、これらの機能を使った「試験」の設定の際に、①学生による提出を1回限りに限定し、②提出の期限を、定期試験と同様の時間（例えば、60分）に設定すればよいわけです。
- (3) ただし、この場合、定期試験のように、学生にテキスト・資料等の持ち込みを禁止することはできません。純粹に知識の習得（暗記と適切な場面での活用等）を試すような「試験」にしたいのであれば、出題する問題数と解答時間を調節して、学生がいちいち資料を参照している時間的余裕が生じないようにするなどの工夫が考えられます。

【オンラインでの「試験（課題）」実施における留意点（学生への配慮）】

- ◎オンラインでの「試験」実施の場合、記号や数字、短答といった出題形式であれば、学生が使用しているデバイス（PC、タブレット、スマートフォン等）の違いを配慮する必要はないかもしれません。
- ◎しかし、「通信上のトラブルで、提出期限までに試験（課題）が提出できなかった」と申し出てくる学生がいる可能性はあります。学生の責に帰せる問題ではない以上、そうした事態への配慮は必要でしょう。再試験やレポート課題等の代替措置を準備しておくなど、あらかじめ対応を考えておく必要があるように思います。

【オンラインでの「試験（課題）」実施における留意点（反応時間への配慮）】

- ◎学習支援システムの「テスト／アンケート」機能を使って、授業中の学生に、同時に一定時間内に多数の設問に答えさせるような中間試験を行った結果、学習支援システムの側の反応が普段よりも大幅に遅くなってしまい、設定した時間内に問題を解き終えることができなかったという報告も寄せられています。こうしたことも起こりうるという認識と警戒は必要なことのように思います。
- ◎上記の事態を避けるためには、「テスト／アンケート」機能ではなく、「課題」機能を使って、学生にはWordやExcel等で作成した「問題用紙」「解答用紙」を配布し、時間内に「解答用紙」のみを提出させる（つまり、学生は、問題用紙・解答用紙のダウンロード時と、解答用紙のアップロード時にのみ学習支援システムにアクセスすればよいようにする）という方法も考えられます。

【オンラインでの「試験（課題）」実施のメリット】

- ◎上記のような留意点への配慮は必要になるのですが、学習支援システムの「テスト／アンケート」機能、Google Classroomの「テスト付きの課題」機能（実質的には、Google フォームで出題をすることになります）を使って出題をした場合には、文章による解答以外は、自動採点をさせることができるというメリットがあります。
- ◎学習支援システムの場合には、さらに採点結果を「成績簿」機能にも反映させることができるので、学期末の成績評価の際には便利です。

【現実的な、悩ましい留意点】

- ◎上記のように、学習支援システムの「テスト／アンケート」機能は便利なのですが、「成績簿」にまで反映させるような使い方をするためには、学習支援システムに接続したままの状態で、一人ひとりの学生の成績を付ける必要も生じます。これは、現在の学習支援システムの接続環境（ログインできたとしても、一つ一つの操作に対する反応が遅い）を考えると、実際上は（待ち時間が長すぎる等）非常にストレスフルな作業にならざるをえません。
- ◎そうした作業を避けるためには、「テスト／アンケート」結果を一括ダウンロードして採点することになりますが、そうすると、今度はローカル・コンピューター上での手作業が必要になります。
- ◎結局、受講者数や出題の形式を勘案しながら、自分にとってもっとも使い勝手のよいシステムは何であるのかをよく考えておく必要があります。

B この際、従来の定期試験にこだわらない試験方法を考えよう、という場合には…

- (1) 自ら望んで始まったわけではないけれど、オンラインという通常と異なる方法で授業を進めてきたからには、評価についても、割り切って、従来の定期試験の手法にこだわらず、オンライン授業環境にフィットした方法で行おうと考える先生もおられることと思います。
- (2) この場合には、常時監視できない環境では管理困難な「持込不可ルール」とともに、受講生側に受験中の通信障害などのリスクがありうる60-100分の「時間制限ルール」も外した試験実施方法が基本になります。
- (3) 上記2条件を外して試験を実施すると考えますと、知識そのものを問う問題は適さず、知識の応用・総合を問う設問が求められます。多様な資料を積極的に活用しながら、推論、思考、判断などを問う設問です。
- (4) ただし、最終的に11段階で評価することを想定しますと、大問1問のみの出題方式では採点時に困る場合もあり得ますので、中小の問題をいくつか出題するという工夫は必要かもしれません。
- (5) 参照自由で時間制限なしとすると、「長文が無難」と考え冗長な解答が頻出する可能性もありますので、「字数の制限あるいは目安」を示す方が良くかもしれません。
- (6) ただそもそも、推論、思考、判断を問うような問題で11段階もの評価ができるのか？との疑問もおもちかかもしれません。その場合には、本資料末尾の「コラム1」をご覧ください。

【上記の形式で試験実施する際の配慮】

◎特に2年生以上の学生の場合、従来型の持込不可・時間制限ありの定期試験向けの勉強スタイルが身につけていて、自由に資料を参照できて時間制限もない試験と聞くと、事前の試験勉強は要らない（出たところ勝負）と勘違いしてしまう場合もあり得ます。その点で、こうした試験方法の場合、例えば多様な資料群の読み込みなど、どのような試験勉強が必要かつ効果的か、事前に多少のガイドを行う方が良いかもしれません。

【上記の形式で試験実施するメリット】

◎メリットは、様々な意味で不安定な通信環境のもとに置かれた受講生もいるなかで、制限された受験時間中に通信環境不調が起きないかという不安を与えないことが挙げられます。

◎また試験に臨む際、パソコン、タブレット、スマートフォンなど使用するデバイスによって解答作成のしやすさに違いが生じる場合もあり得ますが、時間制限が無い（長めに設定されている）ことで、不公平であるとの受けとめが受講生に生じにくいメリットもあります。

【現実的な、悩ましい留意点】

◎推論、思考、判断を問う設問を数問出題する試験は、受講生側にとっても相当な負荷ですが、大人数授業の場合、教員側にとっても相当な負荷になります。既にこれまでの授業プロセスでも実感されていることと思いますが、オンライン授業は教室授業以上に、準備やフォローの手間暇がかかるもの。試験においても従来の定期試験より採点に時間がかかることは覚悟して、それ相応の採点期間を確保する必要があります。

4 どのような評価方法であっても大事なこと

試験、レポートなどの方法を問わず、大事なことがいくつかあります。それは、教室授業と違って、その場で質問できない環境に学生が置かれていること、そして通信や機器の面で学生の受講環境が同一でないことに起因します。

- ①実施前の学生への情報伝達を注意深く、丁寧におこなうこと
 - ・試験、レポートともに、問題(課題)の提示の仕方(掲載場所)、提出方法(場所)などについて、十分な周知期間を設けて、明示すること。
 - ・試験、レポートなどの評価の位置づけや配点、採点基準、採点結果のフィードバック有無などについて、あらかじめ明示し、受講生全員に確実に伝えること。
- ②試験実施、レポート作成期間の質問対応体制を提供すること
 - ・特に制限時間を設けた試験を実施する場合には、試験時間中の質問を受け付ける体制を設けること（SNSやLINEなどを用いる場合、試験時間中、web会議システムを立ち上げておき、質問や連絡がある場合には、チャットで応じるなどの例があるようです）、また可能な場合には、試験の実施練習をおこなうことも、受講生のみならず教員にとっても安心につながります。
 - ・制限時間を設けない試験やレポートの場合にも、質問対応体制の提供は必要です。
- ③学生の受講環境の差異が試験・レポートの結果に影響しない「公平」な環境を作ること

コラムⅠ 「ルーブリック」を活用した評価のほうへ

近年の大学教育をめぐる議論では、知識の習得ではなく、思考力や判断力などを育てる授業が求められ、試験のあり方も、そうした能力を問うものに転換すべきだと言われています。

他方、大学教育の現実（実態）としては、大人数の学生が履修するがゆえに、学期中に小刻みに何度もレポートや課題等を課すことが困難で、結局のところ、成績評価はもっぱら学期末試験に頼らざるをえないような授業も存在しています。

そんな大規模授業において、知識ではなく、思考を問うような試験をやっているのは、II 段階のレターグレードでの成績評価など付けられないのではないかと。——こう思われる先生もおられるかもしれません。しかし、必ずしもそうとは限りません。



一つの工夫の仕方として、「～について考察しなさい」といった総合的（包括的）な出題をするとしても、教員側としては、採点の際の「評価の観点」を事前に設定しておくという方法があります。

例えばですが、①問題設定の適性さ、②テーマについての内容理解、③先行研究のフォロー、④論述の説得力、⑤考察のオリジナリティ、⑥表記の適切さや表現力といった評価の観点を設定し、それぞれに配点を与えておきます。②の内容理解などは、設題に即して、さらに分節化できるかもしれません。

こうした評価の観点ごとに、学生の答案の到達度に沿った得点を与えていき、それを合算すれば、かなりの程度まではバラツキのある採点結果が出てくるはずで



「評価の観点」は、内容的な項目としては（上記の②）、シラバスの「到達目標」に掲げてある、学生に身につけさせたい能力が当たるはずですが、それ以外にも、身につけてほしい汎用的な能力等（上記の①③④⑤⑥）を設定しておくことができます。



教育研究の用語で言うと、これまで述べてきた「評価の観点」のことを「評価規準」と言います。そして、それぞれの観点ごとの到達度を評価する基準を「評価基準」と言います。どちらも「キジュン」であるため、あえて「ノリジュン」「モトジュン」と言い分けることもありますが、教育業界のニッチすぎるジャーゴンかもしれません。

それはさておき、「評価規準」と「評価基準」を組み合わせたものが、「ルーブリック表」です。そして、ルーブリック表に基づく評価が「ルーブリック評価」と言われます。こちらは、近年、大学教育の世界でも大いに注目されているものです。

ルーブリックは、事前に学生にも周知しておくことで、当該の授業のねらいや到達目標をわかりやすく伝える役割を果たすことにもなります。

【レポート採点に関わる汎用的ルーブリック】

	優良	普通	不可
課題の理解	出題の意図を理解した上で、期待以上のことが加えられている	出題の意図を理解している	出題の意図を理解できていない
内容の論理性	序論本論結論に一貫性がありわかりやすく、客観的根拠を用いた説得力ある文章になっている	序論本論結論に一貫性がありわかりやすいが、客観的根拠に欠ける	論理の飛躍や説明不足により何が言いたいかかわりにくい
日本語の正しさ		誤字・脱字・文法の誤りがない	誤字・脱字・文法の誤りがある
体裁	指定された体裁通りになっている		指定された体裁通りになっていない

日本高等教育開発協会「ルーブリックバンク」 <https://www.jaedweb.org/blank-3>

コラム2 「形成的評価」のほうへ

「この際、オンライン授業環境によりフィットした試験方法を」をさらに発展的に考えれば、オンライン授業の経験を通して、より本質的な教育のあり方に近づいていくことも可能です。

以下に、2つのオンライン授業のプランをご紹介します。このいずれにも共通しているのは、1回の授業に、講義、ワーク、フィードバック、レポートなど多様な活動が組み合わされていることです。この授業スタイルの特徴は、学生同士や、学生と教員のコミュニケーションが重視されていること、そして毎回の授業プロセスに評価活動が内包されていることです。

今学期のオンライン授業は、事前の準備もなく始まったもので、皆が手探りですが、本来的なオンライン授業は、このような多様な活動から構成される形が、比較的多いようです。

この多くのオンライン授業にみられる評価手法、すなわち、授業のプロセスに評価が内包され、学生の理解度を継続的にモニターする手法を、教育評価論では「形成的評価」と呼び、学期末にまとめて実施する評価（総括的評価）と区別して捉えます。

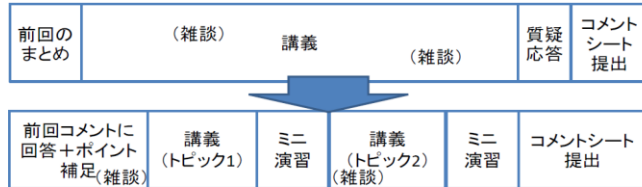
日本の学校教育では、小学校から大学まで、期末に成果を問う総括的評価に比重がおかれがちで、プロセスを問う形成的評価の視点は希薄と言われることがあります。総括的評価の難点は、最後に行われる評価であるため、そこで学生の躓きが発見されても対応、修復がしづらい点です。学生の理解しづらさ、躓きやすさに早めに気づき、授業のあり方や学生の学び方を見直し、適宜修正を図るための形成的評価は、教育にとって有効な方法でもあります。

オンライン授業とは、形成的評価を内包して展開される、より本質的な教育のあり方を示唆するモデルと言うこともできるかもしれません。

授業モデル転換の例



- 「試験に向けて教える」モデルから「学習ガイド・ペース管理」モデルへの転換
- 授業に形成的評価を組み込んでフィードバックを増やす
 - フィードバック増 = 学習効果大、満足度上昇
 - 反応が見える = 教員もモチベーションが上がる
 - 従来の筆記試験ができない悩み自体を解消する



藤本 徹 (東京大学) 「難局を乗り越えるためのオンライン授業評価：基本的な観点と方法」

国立情報学研究所【第6回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム
2020/5/1

https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200501-7_Fujimoto.pdf



「経済政策」の授業デザイン (5/25現在の理想形)

- 受講情報の提供 (約5分) 13:00~
- チェックインの(グループ)個人ワーク (約2分+シェア3分)
- 前回の復習とフィードバック (約10分) ~13:20
- 講義と投票 (約15分) 13:20~13:35
- ミニ・(個人)ワークによる課題発見 (約2分+シェア3分)
- 講義と投票 (約30分) 13:40~14:10
- 本日の(個人)ワークによる課題解決 (約5分+シェア5分)
- 最後の投票や課題の告知 (約5分) ~14:30

ブレイクアウトルームは、200人以下でないと使えません。

岡田徹太郎 (香川大学教授)
報告スライド
法政大学「第4回オンライン授業に関するweb講習会」
(2020/5/26)

<https://drive.google.com/drive/folders/lchZFTl3EQuq9fbbd745PBszZ2u5sBJtS?usp=sharing>

以上